

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	1770101531		
法人名	特定非営利活動法人菜の花		
事業所名	グループホーム菜の花・金沢		
所在地	金沢市北塚町西446番地		
自己評価作成日	令和3年 2月 1日	評価結果市町村受理日	令和3年4月6日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaigokensaku.jp/
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	株式会社寺井潔ソーシャルワーカー事務所
所在地	石川県金沢市有松2丁目4番32号
訪問調査日	令和3年3月16日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

① 全職員は「1週間の予定」「1ヶ月の予定」をしっかりと把握し、「重点的なケアを必要とする人の把握」「病状が不安定な人の気配りすべきケアの把握」等は良く理解し実行しているが、管理者の力量不足があって、代表者が朝のミーティングを仕切っている一面がある。
 ② 前年度に努力して身に付けた「職員の情報共有の強化」「職員間の伝達を密にする」は、「十分に出来ている。ただ、長年勤務職員の気の緩みや高齢職員が多いこともあって、伝達を繰り返さないと職員に届かなかつたり、リーダーが回覧書類への確認サインを繰り返しチェックしなければならない一面がある。
 ③ 令和2年度の目標は「外国人技能実習生導入に対する対策」であったが、コロナ騒ぎの為に訪日出来ず、又、余り遠くなくない内に代表者が代わることから、この課題は立ち消えとなっている。(平均年齢87.3 歳 / 要介護 2.1)

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

今年はコロナのため、以前のように利用者と一緒に地域行事等に参加することは難しくなっているが、中でも早咲きの桜を見にドライブしたり、散歩に出掛けたり、ウッドデッキでお茶を楽しんだりしている。外出自粛以前は利用者と一緒に買い物に行っていたが、感染防止のため、食材や日用品の買い出しは職員が行っている。その日の食べたいものを利用者から聞いて、利用者の希望も取り入れつつ季節の物、旬の物を買出しに行く。利用者のその日の状態に応じて、皮むきや配膳、盛り付けなどに参加し、利用者職員と一緒に食事している。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~59で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印
60	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25) ○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんど掴んでいない	67	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19) ○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
61	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,42) ○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	68	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20) ○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
62	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:42) ○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	69	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4) ○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
63	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:40,41) ○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	70	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12) ○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
64	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:53) ○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	71	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う ○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
65	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31) ○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	72	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う ○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
66	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28) ○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	小規模施設が得意とする濃やかな個別ケアの実践に努めていて、「うちのばあちゃんだったら、どうする？」を合言葉に、慣れによる気の緩みに気を付けながら、管理者・全職員が心を一つにして努力した。	「うちのばあちゃんだったら、ならどうする？」を理念にして、常にそこから考えている。管理者は毎日の申し送りや、ミーティング時にもその都度職員に語りかけている。理念はパンフレットや、掲示してあり職員間での共有を図っている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一人として日常的に交流している	町会ゴミ当番・地域の清掃・神社参り等に参加しながら、道で出会う近所の方や通学中の小中学生への挨拶等、日頃からの繋がりを大切にしたいと願っていたが、コロナ騒ぎの為に、今ひとつ、地域に出掛けられなかった。	今年はコロナのため、以前のように利用者と一緒に地域行事等に参加することは難しくなっているが、中でも早咲きの桜を見にドライブしたり、散歩に出掛けたり、ウッドデッキでお茶を楽しんだりしている。感染防止のため、食材や日用品の買い出しは職員が行っている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	散歩や外出時に会った地域の方々と、挨拶や会話を繰り返したり、近所のケーキ屋や美容院を利用しているが、積極的な地域貢献と言える程のものではない。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	毎回議題を決めて真摯に取り組んだが、議事録に代えた物が3回あり、3月開催分を除いて2回しか開催出来なかった。火災避難訓練の運推では、家族から高い評価を頂いた。職員は嬉しかった。	感染防止のため、3回は書面によるもので行い、議事録を委員会めんばーに送付している。対面で行われた会議は、地域包括、民生委員、市役所職員、家族等が参加して、災害訓練を行ったり、経営状況について報告をしている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	GH便りを金沢市介護保険課に送付し、又、疑問や質問等があれば、市担当者にFAXで問い合わせをしている。	昨年度金沢市の実地指導が行われ、特に改善点や問題点の指摘はなかった。今年度は、事業者連絡会の開催もないため他事業所の交流は特に行われていない。「便り」が出来た時には金沢市に送付して、事業所の取り組みを伝えている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	定期的に全職員に身体的拘束防止マニュアルを回覧し、幹部職員は3ヶ月に1回、身体的拘束等適正化委員会で拘束の是非を話し合い、身体的拘束をしないでよいケアへの努力を重ねている。	身体拘束防止のマニュアルが整備されて、研修はそのマニュアル(テキスト)を配布してミーティング時を利用して行っている。また、身体拘束適正化のための委員会は3カ月に一度実施されている。建物の施錠は夜間常防犯上の観点で実施している。また、転倒予防のために家族から了解を得て、センサーを使用している方もいる。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	全職員は、虐待がいけないことを正しく理解していて、以前は強い口調で話し掛ける職員もいたが、今は全くない。コロナ感染予防で職員はマスクを着用していて、大きな声があたかも虐待のように聞こえないか？十分に注意している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	今回、成年後見制度利用の利用者が入居されたのを機に、日常生活自立支援事業のパンフレットも回覧し、両事業への職員の知識取得に努めている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又はや改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	入居時、当GHの料金体系・運営方針・介護への取り組み等の十分な説明を行い、必要な時は、請求書に「お知らせ」を同封する等の努力をしている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	毎年の運推会議で、代表者自ら、経営状況・運営方針等を説明し、家族の要望を聞く機会を設けている。毎月職員は、利用者希望調査を行い、実践と改善に努め、シーツ交換時には、家族にコメントを求めている。	毎月家族に参加してもらい、利用者のシーツ交換を行っている。コロナ下であるが今年もそれは継続して実施しており、その際に職員は家族意見や要望を聴取している。また「便り」が出来た時には施設からの手紙を同封している。今年度は面会制限についてのお詫び、利用者の受診について、新型コロナウイルス感染症対策等を家族に伝えている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	コロナ感染予防の観点から、NPO法人菜の花グループのGH管理者会議は開催出来なかった。全体職員会議、ミニスタッフ会議等の開催も少なかった。1年間、代表者・管理者・職員共、コロナに明け暮れた。	管理者は他の職員と同じ勤務シフトに入っている。いつでも職員の意見や提案を受けている。代表者も朝の申し送りや、職員会議にも参加して職員の意見を聞いている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	給与水準は高く、代表者は残業しない仕事のやり方を強く指導し、定時帰宅を求めている。当GHは、ほぼ出来ている。又、代表者は本人の努力に対して正しく評価を行い、同業他社に比べて賃金は高い。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	GHの業務は多岐に亘り、1人の職員が、介護・栄養士・看護師・事務員・相談員・清掃員等を兼務する。このような多岐の業務をこなすことはストレスが大きい。前年度行った書類簡素化の効果は大きく、職員のストレス軽減につながった。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	コロナ感染予防の観点から、代表者は他GHの経営者等と電話での情報交換を良くしたが、コロナの為に、職員間の相互訪問等は出来るはずもなかった。コロナが静まれば、法人系列のGH職員交流をしたい。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居当初は全職員1人2声運動を実施する等して、利用者が不安に思っていることや、困っていること等に耳を傾け、信頼関係作りに最大限努めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	家族には入居後数日間に渡り、利用者の様子を電話で知らせたり、入居者特集号を郵送したりして不安感解消に努め、利用者・家族双方が、安心出来る関係作りに努めている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	この問いはGHの理想の姿であるが、「他のサービス利用も含めた対応」まではしていない。ただGHよりも療養型が相応しいケースや、在宅のままの方が相応しいと判断した時は、そのようにアドバイスしている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	当GHでは、漬け物・梅干し・らっきょう・カタハ・梅酒等を漬けるが、若い職員は何も知らず、利用者に笑われながら指導を受けている。ギブ&テイクの良い関係である。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	コロナ感染予防の観点から、シーツ交換の是非を色々検討したが、毎月家族が来所され、シーツ交換と面会を行った。そして、利用者の精神的安定の為に、面会制限を極力避けた。コロナリスクと利用者の笑顔の間で、管理者は悩んだ。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	コロナ感染予防の観点から、家族の面会が手一杯であり、利用者の馴染みの友人を招き入れるような状況ではなかったが、馴染の人に頻繁な手紙を書く利用者への支援は行った。	入居時には、家で使っていたタンスやTV、衣装箱、仏壇、遺影や自分の趣味活動に使うもの等様々な物を持ってきてもらっている。入居後にも自分の荷物整理に帰ったり、中には一泊してくる人もいる。コロナ下ではあるが家族との面会は一時中断したが、継続して実施している。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せず利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	利用者1人ひとりの生活歴や性格を把握し、得意なことを活かしながら、利用者同士が共に支え合い、関わりが持てるよう支援している。又、利用者同士の相性に配慮し、頻繁な部屋替えも行っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	「退居者特集号」を作り家族に送付し、転出先の施設等へ、ケアマネが安否確認の電話をしている。又、長年GHIに在籍され、その後、転出先の施設で死亡されたような場合は、法人からお悔やみのお花等も送っている。十分過ぎる程のフォローをしていると思う。		
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	毎月のアンケートで1人1人の希望を聞き、実行出来るよう努力している。意思疎通の難しい人には職員が身振り手振りで伝えているが、本人の意向を把握出来ているとは言えない。しかし、穏やかな表情なので、満足されているように思う。	認知症のある方の施設なので、言語によるコミュニケーションが難しい方もいる。利用者の言葉にならない言葉を聞き取るために表情を観察し、いまどのような感情を持っているかを感じ本人本位の検討ができるようにしている。本人理解のために家族から暮らしぶりや生活歴を聞いたり、本人からも聞き取りしたりしている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	利用者の入居前の生活をケアプランに表記し、全職員が把握している。そして、無理に過去の生活歴を聞こうとせず、現在の姿をありのまま、受け止めようとしている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	職員は、1人ひとりの一日のスケジュール、心身状態、有する力の把握に努めている。朝夕の申し送り時に、注意すべきことがあった時は、必ず伝達している。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	利用者・家族の希望を伺い、職員で話し合っ、ケアプランを立案している。また毎月ケアの目標を定め、月末には担当職員でモニタリングを行い、翌月に反映させている。	計画作成担当者がアセスメントを行い、ミーティング時を利用してサービス担当者会議やモニタリングを行っている。特に大きな変化がない場合でも12か月で介護計画は更新している。個人の記録は、一人ひとりの排泄、食事、水分記録と個別日報(ケア記録)がある。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	個人日報を見直し、より健康管理がスムーズに出来るよう「健康管理表」を作成している。そして、表に基づき、日々の健康状態を詳しく確認している。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	家族の事情に応じて医療機関の受診代行、自宅への送迎、シーツ交換時の洗濯代行サービス提供等、必要に応じて柔軟に取り組んでいる。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	ご近所の神社に度々参拝し、ドラッグストアやJA直売店に職員同伴で買い物に出掛け、近所の美容師さんと呼んで美容する等の地域に溶け込む努力をしている。散歩の際にはご近所の方と心のこもった挨拶を交わしている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	1年に1回、家族に主治医往診に立ち会って頂き、主治医より診療内容について直接説明を受けて頂いた。又、薬剤は本年度、薬剤変更が殆どなかったこともあり、薬剤師による説明を受けて頂くとしたが、希望家族がなかった。	協力医療機関が主治医となっている。主治医は往診してくれるので職員と医師は直接にやり取りしている。主治医は24時間オンコール体制をとっているため、急な発熱の時も対応してくれる。また、訪問看護ステーションや薬局もオンコール体制をとってくれている。毎年1回は心電図やレントゲン撮影のために協力医療機関へ通院して利用者の健康管理を行っている。歯科や眼科も往診してくれるため、家族は安心している。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	水口クリニック訪看は、以前の「訪看こそすもす」と比べて技術的・精神的に未熟で、訪看としての訓練が必要と思う。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院時は介護記録を医療機関に送付している。又、家族と連絡を取り合い、利用者の状態を相談したり、医療機関の相談員や当GH主治医と連絡を取り、早期退院に努めるマニュアルはあるが、本年度、該当者がいなかった。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所ですることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	今まで何例かの看取りの経験はあるが、本年度は該当者がいなかった。今までの看取りから、職員は多くのことを学んだ。そして学んだことを、自分の人生に取り入れたいと願っている。	利用者が重度化した時には、家族と話し合いながらケアマネージャーが特養等への移行について調整している。看取りは昨年度末に1事例があった。終末期で積極的な医療支援が出来ないことを医師が説明し、家族が確認し、施設職員のマンパワーや他の利用者への関係等を総合的に勘案し、看取り指針に基づいて同意書もらい実施した。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	全職員は繰り返し、緊急マニュアルを基に訓練を行っていて、又、救急救命訓練を受講済だが、非常時、職員がマニュアルを基に、咄嗟の判断を加えて動けるか？ と言うと、難しい。介護職員の欠点は、総合的判断力の欠如である。		
35	(13)	○緊急時等の対応 けが、転倒、窒息、意識不明、行方不明等の緊急事態に対応する体制が整備されている	当GHには詳細なマニュアルがある。又、職員の変動が少なかったことから、全職員の頭にしっかりマニュアルが入っていると思うが、マニュアル通りではない臨機応変な対応は、不得手と思う。	救急対応や無断外出、異変の観察、誤飲、窒息等状況別の対応方法をそれぞれマニュアル化して一冊のファイルにまとめた「緊急時マニュアルファイル」を作成し、月に3回マニュアルの確認を行う機会を設ける形で職員に周知している。マニュアルは年に1回見直しを行っている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
36	(14)	○バックアップ機関の充実 協力医療機関や介護老人福祉施設等のバックアップ機関との間で、支援体制が確保されている	協力医療機関との連携は十分にある。当GH代表者と、連携施設の老健理事長や、老健を含むグループ内事務局長との交流はあるが、現場サイドの交流はない。これは非常時を想定したバックアップと考えられるので、現場サイドの交流が課題である。	協力医療機関である内科は月に2回の定期的な往診の他、利用者の状態に変化が見られたときは夜間を含め、随時の対応が可能である。バックアップ施設である介護老人保健施設とは代表者同士意見交換を行っているほか、ホームの介護支援専門員が地域の居宅介護支援事業所へと足を運び情報交換を行っている。	
37	(15)	○夜間及び深夜における勤務体制 夜間及び深夜における勤務体制が、緊急時に対応したものとなっている	緊急時、男性職員の方が冷静に対応出来、利用者を運ぶ等の力仕事に得意だと考え、夜勤には男性職員を多く採用している。又、近隣に住む職員がすぐに駆けつけられるような連絡網も完備している。	1ユニットのホームで夜勤者は1名であり、緊急時15分以内に駆けつけられる職員は3名いる。救急搬送の場合に備えて既往歴や薬剤情報、緊急連絡先等を記入した「緊急時情報シート」を準備している。協力医療機関の医院は24時間オンコール体制の他、かかりつけ薬局も夜間対応が可能である。	
38	(16)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	GH内の出火場所を、離れた2箇所の場所に想定し、火災訓練マニュアルを根本的に見直したり、避難ルートを変更したりした。職員は頭で分かっているが身体が動かず、毎月1回の再訓練実施中。	年に2回、運営推進会議の中で避難訓練を行っている。今年度は様々なシチュエーションを想定し、出火場所を変えて訓練を行っている。出火場所が変われば避難経路も変わるため、今まで見ていなかった非常時のリスク等に気づくことが出来たと聞き取った。	
39	(17)	○災害対策 災害時の利用者の安全確保のための体制が整備されている	非常時にはボタン1つで、代表者・管理者・法人内関連GHに携帯電話がつながるようにセットされているなどの、濃やかな体制が整備されている。大水害を想定し、ケアハウスあいびすに避難出来るよう、法人間の話し合いが完了した。	食料や布団、マスク、コンロ、ストーブや湯たんぽ等非常時の備品を数量や保管場所とともにリストアップし、リストに基づいて保管とチェックを行っている。避難所は近隣の小学校ではあるが距離があるため、万一の際は近隣のケアハウスへ避難できるよう話し合いを行った。	
40	(18)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	職員チェックリスト(入居者対応・言葉遣い)で、職員自身が自分の心に問いかけ、利用者の人格やプライバシー尊重に十分な配慮をしている。	「職員チェックリスト」に基づき、プライバシーや尊厳に配慮した声掛けを行っているか定期的にチェックしている。トイレ誘導の際は耳元で声をかける、部屋に入るときは了解を得る、自己表現が難しい方は何を言おうとしているのかを表情の変化やジェスチャーで読み取る等の実践を日頃から行っている。	
41		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	献立やお茶の種類のリクエストを求めたり、レクリエーションの選択をご本人に委ねたり、家事も利用者の得意なことをお願いしたり、外出先も利用者の希望を最大限取り入れたりの配慮をしている。		
42		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	利用者個人の生活のペースの尊重に努めているが、夜間入浴や自由な外出等、今の厚労省の人員配置基準と介護保険報酬では、これ以上の支援は難しい一面もある。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	自分の化粧水・乳液等を持参頂き、入浴後はお肌の手入れを行っている。上下バランスの取れた服を着用し、ファッションブルに装ってる。		
44	(19)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	献立は家庭料理そのもの。大和デパート地下等で新鮮で安くで高級な食材を手に入れ、利用者は調理から後片付けまで、職員と一体で行っている。姿勢良く食事を楽しむ為に、ちゃぶ台での食事を止め、食堂テーブルでの食事に切り替えた。	その日の食べたいものを利用者から聞いて、利用者の希望も取り入れつつ季節の物、旬の物を買出しに行く。外出自粛以前は利用者と一緒に買い物に行っていた。利用者のその日の状態に応じて、皮むきや配膳、盛り付けなどに参加し、利用者と職員と一緒に食事している。	
45		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	低脂肪・高たんぱくのヘルシーメニューを心掛けている。利用者の中には持病の為に、塩分・水分制限・繊維質多量摂取の利用者もいる。		
46		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	年に1回の歯科検診の実施した。コロナ感染予防の為に、毎食後の口腔ケアの徹底と舌ブラシ使用、就寝前の入れ歯洗浄の徹底を図った。全職員は1人1人の歯磨きチェックや義歯の状態等を把握している。		
47	(20)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	利用者と職員が少人数であるGHの利点を生かし、職員は利用者の排泄パターンをほぼ把握している。よって、利用者の排泄失敗事例は非常に少ない。	個人の日報の中で排泄チェックの記録をつけ、便秘が2日続いたら申し送りをを行い、快適に排便ができるよう、納豆や牛乳、乳酸菌飲料を飲んでもらう等の支援を行っている。利用者一人ひとりの状態に応じ、リハビリパンツを布パンツに変えることができるよう検討し、排泄の自立に向けた支援を行っている。	
48		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	献立に食物繊維を多く取り入れ、歩行運動を継続し、便秘の際には腹部を温かいタオルで温めたり、マッサージを行ったりしている。排便が3日以上続く時は主治医に相談したりもしている。		
49	(21)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	入浴日や時間帯に縛りはあるが、職員の負担と業務の優先順位等を総合的に判断し、入浴回数が多ければ良いと言う考えを捨てた。又、色々な香りの入浴剤や、菖蒲湯・柚子湯等を楽しんでいる。	入浴は週2回行っており、他にも季節や状況に応じて足浴の支援やホットタオルの提供等を行っている。入浴を拒否する方に対しては、声掛けする時間を変えたり職員を変えたり対応しているが無理強いはいしない。入浴剤や菖蒲湯、柚子湯、好みのシャンプー、風呂上がりのドライヤーなど、利用者一人ひとりが入浴を楽しんでもらえるよう支援している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	夜間、不眠がちの利用者がいない。安眠に繋げる為に、日中に身体を動かし、趣味の時間を楽しめるよう支援し、夜勤職員はよもやま話からスタートし、心の内を静かに伺うなどの傾聴に努めている。		
51		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	毎月、薬剤チェックリストで、現場・代表者共、不要な薬剤のチェックを行っている。又、請求書発送時、家族に薬剤情報送付を継続している。そしてトモコ薬局の居宅療養管理指導は有益で、実のある指導を受けている。		
52		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	コロナの為に人込みを避け、頻繁なドライブを繰り返した。楽しみごと(絵手紙・読書・パズル・大人の塗絵・フラワー教室・お経・踊り・ラジオ体操)、家庭菜園、朗読教室、音楽療法等、一人ひとりに合った活動参加を促している。		
53	(22)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	利用者の希望に基づき、天候と体調に相談し、散歩・お参り・ドライブ等に出かけているが、現在の人員配置基準では、ここら辺が限界。ボランティアに外出支援を頼み、事故等が発生した場合、責任所在に多くの問題が生じると考える。	現在はドライブや通院送迎、天気の良い日の散歩、中庭で寛げるような支援を行っている。自肅要請以前はバラ園や卯辰山、兼六園への外出行事、町会行事への参加や買い物、喫茶店の利用など多種多様な場所へ外出する支援を行っていた。希望する利用者には自宅への外出や外泊の支援も行っている。	
54		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	利用者2人が金銭管理をされており、お金は買い物や神社仏閣への参拝時のお賽銭等に使われている。金銭出納帳は1か月に1度、担当者・管理者が点検し、家族から確認印を頂いている。		
55		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	利用者が、年賀状・暑中見舞い・絵手紙等を家族宛てに書くよう支援し、宛名やコメント等は職員が代筆するなどしている。長年特養でボランティアをしていた利用者は、特養施設長に頻繁に手紙を投函している模様。		
56	(23)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	今風の冷たいデザインではなく、高齢者にとって居心地の良い空間だと自負している。そして畳や障子を多用し、居間からは季節ごとの草花が咲く庭が見渡せる造りになっている。	前庭には桜の木があり、玄関やウッドデッキからは季節の花を見て楽しむことができる。花を前にして談笑する利用者もいれば、一人になりたい利用者にはかつてユニットとして使っていた6人棟を利用してゆっくり過ごすこともできる。新型コロナウイルス対策として、食事は共用スペースに加えて職員室も利用し、十分なソーシャルディスタンスを確保している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
57		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	共用空間(居間・廊下・玄関先)では、所々にソファやベンチを配置し、気の合った利用者同士で思い思いに過ごして頂けるよう工夫している。又、ウッドデッキを日向ぼっこに役立てている。		
58	(24)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのもを活かし、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	写真や思い出の品・馴染みの品を、家族に持参して頂いているが、これ以上の協力は難しいので、最近では自室に絵手紙や俳句等を飾り、花の季節に本人の写真を撮り、額装して飾っている。	居室の備品は畳と障子のみとなっているため、ダンスやテレビから、仏壇や家族写真、編み物道具など、利用者が使い慣れたものや馴染みのものを持ってきてもらうよう声掛けしている。職員が居室に入る際は必ず同意を得るようにし、利用者のプライバシーを確保している。	
59		○身体機能を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	建物全体が純和風となっており、畳を使用することで気持ちが和らぐ。トイレは「便所」と分かり易く表示している。全館バリアフリーで、また足腰の悪い人に配慮してソファを廃棄し、硬いクッションのベンチに取り換えた。		